

京都大学	博士（文学）	氏名	金 東鎮
論文題目	來知徳の易學の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>易学史の研究において明代の易学は等閑視される傾向にあった。それは、永楽帝の勅命による『周易大全』の編纂により、程頤の『易伝』と朱熹の『周易本義』を基にする程朱易学が正統的易解釈として認められ、明代における程朱易学の影響が強かったためである。また、黄宗義をはじめとする、清代易学の程朱易学に対する批判的立場も、そうした明代易学の風潮に対する反発として理解されてきた。しかし、こうした認識は、易学史における明代と清代の断絶との誤解を招く恐れがある。なぜなら、明代易学史においても義理を重視する程朱易学を批判し、象数を以て易を理解しようとしたものが存在し、彼らの易学が清代易学における程朱易学への批判に影響を及ぼしたと見受けられるからである。その代表的な人物が來知徳である。</p> <p>來知徳（一五二五～一六〇四）は、字は矣鮮、号は瞿唐、四川梁山（今重慶市梁平県）の人で、蜀の易学を代表するものとして程頤と並称されるほどの明末の著名な易学者である。來知徳が（四川）万県の中中に籠もり易に没頭すること二十九年にして完成したのが『周易集注』である。その易説は繫辞上傳の「錯綜其数」を基として易の象を論じたもので、それがすなわち來知徳の易学を代表する「錯綜説」である。文王の序卦（六十四卦の配列）に基づく來知徳の錯綜説は、近世中国のみならず朝鮮や日本にも大きな影響を及ぼしたものである。そのような近世易学史における來知徳の影響を考慮すれば、來氏易学の研究は近世易学史の解明のためにも一考に値すると考えられる。</p> <p>本研究は、かかる來知徳の易学を取り上げ、その易学体系の特徴及び後代の易学への影響の考察を通じて、易学史における來氏易学の意義を明らかにするものである。</p> <p>第一章の「來知徳の錯綜説」においては、來氏易学を代表する錯綜説を考察した。錯は乾☰☰坤☷☷のように陰陽反対の兩卦の関係をいい、綜は屯☳☳蒙☶☶のように上下反対の兩卦の関係をいう。従来の研究は兩卦の関係を意味する錯綜説が、漢易の旁通卦（錯）や反対卦（綜）の類似技法であり、六十四卦の配列に関する「非覆即変」説の敷衍であると評価する。しかし、かかる評価は程朱易学が主流を占めた明代易学の風潮を考慮に入れていないものである。</p> <p>來知徳の錯綜説はその当時の程朱易学の義理易や先天易を批判するもので、それは『周易大全』に対する來氏の批判から窺える。來氏は『周易大全』における象の軽視や、兩卦が対になる現行本の卦序を考慮しない分巻体制を批判し、卦序に現れる錯綜の象を強調する。</p>			

来知徳は『周易』の成立過程における文王の役割に着目して、その「六十四卦の配列」に秘められている錯綜の象が「卦爻辞」創作の原理を表していると考え、繫辞伝の「錯綜其数」の新解釈を通じて錯綜説を形成する。その形成においては漢易の「旁通」説・孔穎達の「非覆即変」説・「上下経各十八卦」説・朱熹の「錯綜」説の影響が見られる。しかし、来知徳はその錯綜説に基づく新しい易解釈を試みながら、その錯綜説に「陰陽の对待と流行」という易の原理や、「交易と変易」という易の両義を結び付けて、伏羲の先天易と文王の後天易の統一を図る。それを通じて、来知徳はその当時流行した先天易の先天後天の説を乗り越えようとしたのである。そのような来氏の錯綜説には朱熹の易学の影響が強く見られる。

来知徳はかかる錯綜説をさらに十翼の解釈にまで適用して、『周易』全体の解釈において錯綜説を貫く。来知徳は、孔子の十翼は陰陽の对待と流行という錯綜の原理を敷衍説明したものであり、その中で錯綜を最も明確に表しているのが序卦伝と雑卦伝であると考え。特に序卦伝を聖人の書と認めない韓康伯以来の批判を、来知徳は錯綜の原理を知らないものと強く批判したのであるが、それは来氏が序卦伝の論理に拘らずその卦序の象に注目したためである。

以上のように、序卦伝と雑卦伝の新評価や、先天後天の原理を統合しようとした来知徳の錯綜説は、易学史における来知徳の功績として評価できると考えられる。

第二章の「来知徳の卦変説批判と卦生成論」においては、来知徳の卦変説批判に焦点を合わせて、来氏の卦変説批判の意図やその批判の根拠である錯綜説と爻変説の関係及び卦生成論を明らかにした。

錯綜説に基づく来知徳の卦変説批判を氏の易学体系の中で理解しようとする際に次のような疑問点が生ずる。第一点は、来氏の易学体系における「卦変説批判」と「爻変説」の関係の問題である。来氏は易解釈の主要原理として錯綜・中爻（互体）と共に「変」を強調するが、朱伯崑氏は来氏の「変」を爻変説と定義して卦変説と区分する。しかし、爻変説が結局爻変による卦の変化を意図するという点などを考慮すれば、卦変説と爻変説は既存の定義のように明確に区別可能なものではない。そうであれば、来知徳の卦変説批判は氏の易学体系において爻変説の主張と相容れないものとなる。かかる両説の関係を解明するためには、来氏の批判する卦変説と氏の主張する爻変説がより具体的に説明される必要がある。

第二点は、来氏の卦変説批判が氏の易学体系において新たな卦生成論を必要とするという問題である。何故なら、従来の卦変説は程朱易学において卦の生成変化を説明する卦生成論として理解されてきたためである。程頤は説卦伝の乾坤生六子説に基づいて八卦の生成を説明し、その程氏の説を批判した朱熹は先天後天の説に基づいて自某卦来之説を後天易の卦生成論と理解した。しかし、来知徳において卦変説批判の根拠となる錯綜説は、文王の『周易』創作の原理を説明する理論で、文王以前に既に存在した卦の生成を説明するものではない。また、来氏は先天・後天の区分を否定する

ために朱熹の卦生成論を受け入れないのである。それならば、来氏はどのような卦生成論を提示しているのでしょうか。この二つの疑問点を解明した先行研究はまだない。

本章の考察によれば、来知徳の卦変説批判は虞翻以来の自某卦来之説による象伝解釈を錯綜説の綜卦に代えたもので、文王の『周易』創作原理である錯綜を『周易』全体の解釈に一貫して適用しようとした意図に由来したものである。来氏の易解釈原理の一つである変は小成卦における一爻の陰陽変化を意味する爻変説で、爻辞の解釈において卦象を導くためのものである。かかる爻変説は来氏の易学体系において卦変説批判の根拠となる錯綜説と相互補完的な関係にあると言えよう。

また、来知徳は程朱易学において卦生成論と認識されてきた卦変説を受け入れないために、それらに代わる卦生成論を提示しなければならなかった。しかし、来氏は朱熹の先天後天の区別を否定し先天易の加一倍法を取らず、繫辞伝に基づいて小成卦の八卦と八純卦の生成を説明し、八純卦の順次的爻変を通じて六十四卦の生成を説明した。来知徳のかかる爻変説と卦生成論からは京房易学の影響が窺える。

第三章の「易学史における来氏易学の影響」においては、王夫之の乾坤並建論や、胡渭と江永の卦変説及び丁若鏞の易理四法を取り上げ、彼らの易説と来知徳批判に見られる来氏易学の影響を考察した。

王夫之の乾坤並建論は『周易』における陰陽二気の不可分・無先後の関係を強調するものであり、その乾坤並建論の基盤となるのが文王の卦序に基づき対になる両卦の緊密な関係を強調した錯綜説である。王夫之の錯綜説には来知徳の影響が見受けられるが、王夫之は錯綜の原理を未だ誰も明らかにしたことの無いものとし、自身のどの著作においても来知徳の名を挙げてはいない。序卦伝に対する相反する評価のように、両氏の錯綜説はその展開においては相異なる様相を見せる。しかし、両氏の錯綜説における類似点を考慮すれば、来氏の錯綜説が王氏の易学形成に一定の影響を与えたこととみなすのが穏当であると考えられる。

胡渭・江永両氏の卦変説は来知徳の綜卦と同じく文王の序卦を根拠とした反対卦を主張するものである。それにも関わらず、胡江両氏は来氏の錯綜説に対して批判的な立場を取る。胡渭は来氏の錯綜説における先天易からの影響を指摘して、錯綜という概念が繫辞伝の原義とは異なる断章取義であると批判し、江永はその錯綜説の綜卦に当たる反対卦が来氏の創案でないことを指摘し、李光地が『周易折中』において来氏の説を排除したのも、象伝の卦変問題を綜卦によって自身がはじめて解決したという来氏の傲慢な態度に起因すると考えた。しかし、文王の序卦に注目して易解釈における反対卦の意味を強調した彼らの卦変説は、錯綜説に基づく来氏の卦変説批判が有効であったことを証明するものであると考えられる。

朝鮮後期の易学を代表する丁若鏞は易解釈の主要原理として推移・爻変・互体・物象という易理四法を主張し、また「来氏易注駁」（『易学緒言』）においては来氏の

錯綜説を強く批判した。しかし、来丁両氏の易学は類似する点が多々見られる。丁若鏞の易理四法を来知徳の易経字義と比較すれば、丁氏の物象・互体・爻変はそれぞれ来氏の象・中爻・変に類似するものであり、来丁両氏の易説における大きな相異は来氏の錯綜説と丁氏の推移説にあることが分かる。丁氏の推移説は、来氏が錯綜説に基づいて否定した卦変を主張するものである。丁若鏞の来氏批判は主に来氏の錯綜説に対するもので、その批判は丁氏自身の推移説を正当化しその説の理論的優秀性を強調するためのものである。推移説をもって卦変を説いた丁氏にとって、そうした卦変説を批判した来知徳とその批判の根拠となった錯綜説は、批判して克服しなければならない対象であったと考えられる。また、来丁両氏の易学における類似点に注目すれば、丁氏の錯綜説批判は来氏易学との差別性を強調するためのものであったと考えられる。

第四章の「易学史における文王序卦の研究と来知徳の「上下経篇義」」においては、易学史における文王序卦の研究について基礎的考察を試み、また来氏の「上下経篇義」を分析して、来知徳の錯綜説の淵源が易学史における文王序卦の研究にあるという点を明らかにした。

本章でいう「文王序卦の研究」とは、易学史における文王の序卦（卦を序す）、すなわち現行本『周易』の六十四卦配列と上下経区分の原理を究明しようとした研究を指すものである。孔子が文王の序卦の意図を述べたものとされる序卦伝がその始まりであると言えよう。序卦伝に由来する「上経天道、下経人道」説やその発展と見られる『易乾鑿度』の「上経象陽、下経象陰」説・程頤の「陽上陰下」説・呉澄の卦統説（分節説）は、上下経の主要卦の意味に注目してそこから六十四卦の配列や上下経の区分に秘められているとされる文王序卦の原理を解明しようとしたものである。それに対して、「上下経十八卦」説は専ら上下経における卦数の一致或いは均等を求めて、それを根拠に文王の上下経区分が単に書物の分量によるものではなく、ある原理による意図的なものであることを証明しようとしたものである。「二二相耦、非覆即変」説はかかる「上下経十八卦」説の重要な根拠となるのである。

来知徳の「上下経篇義」は六十四卦配列と上下経区分の原理について解説したものである。「上下経篇義」の前半においては上下経の卦配列に関する原理を説明する。まず、上下経が乾坤と咸恒から始まることについて、来氏は序卦伝の天道と人道の二分法によって説明する。また、来氏は乾坤と咸恒の上下二卦の入り交じった変化を綜といい、泰否と損益を乾坤と咸恒の綜卦と見なして上下経の主要卦とする。その次に上下経の終わりである坎離と既済未済について説明する。来氏は水火の坎離を乾坤のような陰陽對待の錯を表したものとして、上経の始終卦に現れる錯の原理を天道・体に当てはめる。中男の坎と中女の離からなる既済未済は咸恒と同じく男女の交わり、すなわち陰陽流行の綜を表したものとして、下経の始終卦に現れる綜の原理を人道・用に当てはめる。このように「上下経篇義」の前半は文王の序卦に関する従来の研

究、すなわち「上経天道、下経人道」説や分節説に新しく自身の錯綜説を組み合わせ、文王序卦の原理を解明したものである。

「上下経篇義」の後半においては、上下経区分による卦数多寡の問題を、卦の陰陽爻数の比較を通じて説明する。上経三十卦の陽爻は八十六、陰爻は九十四で、陰が陽より八つ多く、下経三十四卦の陽爻は一百六、陰爻は九十八で、陽が陰より八つ多い。また、屯蒙のように綜の関係にある両卦を一つにして数えれば、上下経は同じく十八卦になる。このように、「上下経篇義」の後半は「上下経十八卦」説に基づいて文王の上下経区分における卦爻数の多寡問題を解明したものである。

このように来知徳の「上下経篇義」は易学史における文王序卦の研究の流れを汲むものであり、来氏の錯綜説もそうした先儒の序卦研究を基にして形成されたものと考えられる。

以上、本論文の考察を通じて、易学史における来知徳の易学の意義を再考するならば以下になるであろう。即ち、『周易』成立における文王の役割に注目して文王の序卦と卦爻辞創作の原理を究明しようとした来知徳の易学は、それまで序卦伝や文王八卦の方位を説明する理論に過ぎなかった文王易にその当時主流であった先天の伏羲易と対等な意味を付与して、「文王易」の易学史的価値を新しく発掘したもので、「文王易」の集大成と評価できるのである。

(論文審査の結果の要旨)

儒教の経書の一つ、『周易』についての研究は、『易学哲学史』(朱伯崑、1995年)の登場によって、一つの画期を迎えたといってもよかろう。もちろん、論じ残された問題も数あるわけだが、こと明代に関しては、とりわけいまだ研究が端緒についたばかりと言っても過言ではない。本論文は、明代易学の総合的研究の第一歩として、来知徳の唱えた象数易について、数理構造の特色を明らかにし、近世易学の史的展開のなかで位置づけようとした意欲作である。

本論文は、序論ならびに本文四章と結論からなる。

序論では、論者の問題意識を明らかにするとともに、本論文が主に扱う来知徳の『周易集注』の版本の系統について考察を加え、張惟任本が最も原書のスタイルを残すものであることを確認する。

第一章では、来知徳の易学の中核をなす錯綜説について、その歴史的な変遷を概観する。その中で、従来の研究においては、錯綜説は単なる二つの卦の関係を示すもので、漢易の手法に類似したものと見なされていたが、論者は宋以来の易学の影響を考察した上で、来知徳の錯綜説の理論的特徴を解明し、易経観を探り出すことで、独自の象数理論を唱えていたことを明らかにしている。

第二章では、卦変説を批判する来知徳が、爻変説を唱えつつも結局は爻変が卦変をもたらすことからかかえる矛盾について、朱伯崑氏の説くように、卦変説と爻変説を区別して考える解釈も結局はその矛盾を解決することにはならないということに注目し、来知徳が批判する卦変説と、彼が唱える爻変説を精密に分析することによって、新たな解釈の可能性を探る。さらに、卦変説を批判するためには、独自の卦生成論を必要とすることから、朱熹のような卦生成論を認めない来知徳がどのような卦生成論を準備するのかを明らかにする。

第三章では、明末清初の王夫之、清代の胡渭、江永、さらに朝鮮後期の学者である丁若鏞といった、来知徳以後の易学者への彼の影響関係を明らかにする。王夫之は来知徳に一切言及しないものの、錯綜説を用い、さらには来知徳が先天易、後天易の区別を解消することのみを求めたのに対し、王夫之は一歩進んで伏羲易と文王易の区別をも認めようとしな。論者はさらに序卦伝に対する二人の評価の違いに注目しつつ、王夫之易学との連続性を指摘する。また、来知徳を批判する胡渭が、実は批判するのは錯のみで、綜までも批判するものではないこと、また、李光地が『周易折中』において来知徳の説を一切排除したことを評価する江永も、錯綜という言葉は使わないものの、文王の序卦に注目して反対卦を主張するのは、原理的には来知徳の発想の有効性を認めていたことを明らかにする。また、「来氏易註駁」を書いて厳しく来知徳を批判する丁若鏞も、その批判自体の中に、丁若鏞の来知徳に対する評価の裏返しが見いだされることを指摘する。以上の所説は、来知徳との関係を見せない王夫之、さらに単なる批判者だとみなされてきた胡渭以下三人の学者の来知徳との連続性を明

らかにした点が特に評価される。中でも、従来あまり注目されてこなかった朝鮮時代の易学について、丁若鏞を取り扱って、来知徳との関係を明らかにしたことは重要な業績である。それは韓国の易学研究を十分消化したうえでなされたものであることも評価できるとともに、朝鮮易学が明代易学を考える上で重要であることを改めて認識させたことと合わせて、注目に値する。

第四章では、文王序卦の解釈の歴史を、『易乾鑿度』、程頤、呉澄ならびにこれまで詳細に考察されたことのない兪琰の易学ならびに、来知徳の「上下経篇義」の考察を通して、来知徳の錯綜説が、兪琰の考えを受け継ぐものであり、さらには来知徳の錯綜説が文王序卦の研究に基づくものであることを明らかにする。

結論においては、来知徳の易学が「文王易」の易学史的価値を新しく発掘した、「文王易」の集大成の意味を持つという見解を提示している。

宋代以降、象数易の主流は、京氏易から先天易へと移行し、邵雍の先天諸図、周敦頤の太極図及び、劉牧が唱え朱熹が修正を加えた河図洛書といった作易本源の聖図に依拠する易図説が大いに流行した。その流れに対して、来知徳は、京氏易を中心とする漢易が活用した諸技法を敷衍した経解釈を主張した。したがって、これまでの研究においては、漢易の継承という側面が強調されている。ところが、論者は、来知徳の唱えた錯綜説、卦変説の数理や文王序卦に着眼した易観念を構造的に把握することによって、単に漢易への回帰を意図したものではなく、朱熹の易説を批判的に継承していることを明らかにしており、大いに注目される。近世の象数易理論は、漢易に比べて研究も少なく、きわめて難解であるが、その解明に果敢に取り組み、手堅く実証的な考察を主眼としている。とりわけ、邵雍の先天易を取り込んだ朱熹の易説との関連性を指摘し、王夫之、江永や朝鮮の丁若鏞といった後世の著名な儒者への影響をも検討しているところは、従来の研究にない斬新なものとして高く評価できるだろう。

なお、加えて呉澄から黄道周、劉宗周、方以智に至る朱熹以降の元明易学者との比較を試みていれば、来知徳の易学の特徴をより鮮明にでき、近世象数易の鳥瞰図が素描できたように思われる。しかしながら、注釈における黄宗羲の『易学象数論』などの部分的な引用に止まり、本論で十分に吟味されなかったために、その方面の論及が欠如していたことが惜まれる。今後において、来知徳を機軸にした多角的な考察を行い、これまで思想的に不毛と評された明代経学の新天地を切り拓いてもらいたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2017年6月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。